

戦国INBA

～変遷する城と館～

館の暮らし

中世という時代を通じて、土地を治める領主などの政治や生活の場であった館や屋敷では、在地の鍋やすり鉢などのほかに、瀬戸・美濃の小皿や碗、常滑の甕などといった今でも有名なやきものの産地の製品も使われていました。

印旛郡内の館は、戦乱の激しくなる15世紀になると、四街道市和良比堀込城跡のように館に深い堀や土塁を廻らし、城郭化していくものも現れますが、多くは16世紀前半までには使われなくなっていきます。代わりに城と屋敷と町が一体となった本佐倉城跡のような形態が中心になります。



成田市 駒井野荒追遺跡

遺跡では台地を削り整地した場所から8棟の掘立柱建物跡が見つかり、さらに周囲を幅1.5mほどの溝で取り囲んでいる状況が確認できました。遺構の規模と出土遺物から、領主の館というよりは、屋敷であったと考えられます。



駒井野荒追遺跡空撮と出土遺物



白井屋敷跡遺跡空撮と出土遺物



四街道市 和良比堀込城跡

主郭を中心に7つの郭で構成され、深い堀と土塁を持つ姿は城と呼ぶべきものといえますが、主郭にある居住用とみられる掘立柱建物跡や鍋、鉢、甕などの生活道具が出土している点から、館が城郭化したという見方もすることができます。



佐倉市 白井屋敷跡遺跡

過去、数次にわたり調査が行われ、台地整形区画や地下式坑、井戸状遺構などが見つかりました。特に平成18年度に行われた第10次調査では、土塁で囲まれた主郭部の調査が行われました。



成田市天王船塚11号墳経塚「経筒」出土状況 (写真：千葉県立房総のむら所管)

中世における下総一帯は、鎌倉時代、源頼朝に味方した功績により下総守護職に任ぜられた千葉氏や、その一族・家臣によって主に支配されていました。しかし、1455年に起きた享徳の乱を契機に、千葉氏にも内乱が勃発し分裂することとなります。千葉輔胤の代には、拠点を亥鼻城(現在の千葉市郷土博物館一帯)から本佐倉城へと移しました。戦国時代には実質的に小田原の北条氏の支配下に置かれ、天正18年に北条氏とともに滅びるまで、酒々井・佐倉一帯は、下総における政治的な中心地となりました。



和良比堀込城跡 板碑



左:本佐倉北大堀遺跡・右:和良比堀込城跡 天目茶碗



酒々井町本佐倉北大堀遺跡 茶釜

いくさびとの精神世界

戦国の厳しい世界は、人々のこころにも大きな影響を与えました。中世に成立した浄土宗や禅宗などの新仏教は武士層だけでなく、一般の民衆にも広く受け入れられ、日本独自の仏教観へと変化していきました。印旛地域でも、五輪塔や宝篋院塔、板碑、経筒、鯨口など、当時の人々の祈りが込められた遺物が見つかりました。

また一方で、日本的な美意識に高められた「茶の湯」が起こり、武将や貴族中心に広く浸透していきました。その精神は、出土した天目茶碗や茶壺の造形から偲ぶことができ、往時の茶の湯の姿がうかがわれます。

中世と呼ばれる鎌倉時代から戦国時代は、現代の日本人の生活の根底を流れる「日本の精神」が形成された時代であったといわれています。争乱の時代を生きた人々のこころが感じられるのでしょうか。



四街道市和良比堀込城跡「石塔」出土状況

本佐倉城と惣構

惣構とは、堀や土塁で城のまわりの屋敷や町場を城と一体化させ、防御させた区域をさす用語です。

本佐倉城や白井城も惣構の城郭で、特に本佐倉城は内郭・外郭・城下が同心円構造を示す都市型の城とされ、16世紀前葉～中葉に再編・拡大し惣構ラインが構築されたと考えられています。

戦国大名は城下を建設しそこに兵力を常駐させ、農村の商工業者などを集めました。その結果町民と農民の分離が加速され、都市と農村の分業が確立してゆきました。城下に武士と町人が居住することで、都市では上方の文化がこれらの階層に広まっていったのです。



酒々井町長勝寺脇館跡(本佐倉城「惣構」の一郭)



本佐倉城の惣構推定ライン図

(1:25,000)

